

人間文化研究所 5周年記念シンポジウム

11月28日(土)14:00~17:00
人文社会学部棟201教室(2階)

記念講演 長野県泰阜村 松島貞治村長

「安心の村」は自律のむら

パネルディスカッション「持続可能な社会」

パネラー: 村井忠政名誉教授・福吉勝男名誉教授・成玖美准教授

コーディネーター: 山田明人間文化研究所長

● 人間文化研究所 5周年記念シンポジウム

11月28日(土)14時から17時まで、人文社会学部棟201教室で人間文化研究所「5周年記念シンポジウム」を開催します。



長野県泰阜村の松島貞治村長が『「安心の村」は自律のむら』をテーマに記念講演します。泰阜村は人口1900人余りの小さな村ですが、「在宅福祉の村」として全国的にも有名であり、持続可能な社会、地域づくりを考えるうえで示唆に富む話をさせていただきます。

記念講演について、「持続可能な社会」をテーマにパネルディスカッションを行います。パネラーは成玖美准教授、村井忠政名誉教授、福吉勝男名誉教授、コーディネーターは山田明人間文化研究所長です。

研究所設立から5年を記念して開催するシンポジウムであり、ぜひとも多くの方の参加をお待ちしています。

● Human & Social サイエンス・カフェ

第26回 サイエンス・カフェ 7月19日

テーマ: 「越境する文学」

講師: 土屋 勝彦教授

7月のサイエンス・カフェは、「越境する文学」という題で、土屋勝彦先生による講義が行われた。はじめに、越境文学についての定義の説明がなされた。「母語以外で執筆された文学」という狭義から「ナショナルティ、人種、男女の境界を超えた文学」という広義にいたるまで、越境文学とは幅広い意味を持つことが分かった。

次に、ドイツ語圏の越境作家の紹介と、社会的状況と文学のつながりについて説明を受けた。越境作家たちは、東欧再編やベルリンの壁の崩壊など、現代社会が抱える政治的問題と文化的問題の中で葛藤し、その問題を相対化し、異化している。複数の文化を往復しつつ執筆する越境作家たちは、アイデンティティの模索のため苦しんでいるが、それが制作活動においては、力になる側面もあるようだ。

例えば移民の武器は、文体表現の新しさである。秩序言語に対して抵抗し、新たな表現法や言語感覚によって言語の規範性から離脱する。母語のイメージを制作言語に置き換えることにより、斬新な文学表現が可能なのだろう。母語以外の言語で執筆する作家は、言語に対するハンディキャップを武器にすることで、大きな可能性を秘めていると感じた。

質疑の時間には、多くの参加者が積極的に質問し、予定の時間を超過するほど、さまざまな議論がなされた。「越境文学」は参加者の年齢も性別も興味の方向さえも超えて、多くのことを語ってくれたのではないだろうか。

野田 いおり (同研究科博士前期課程)

第27回 サイエンス・カフェ 8月16日(日)

テーマ: 「COP10と名古屋の観光まちづくり」

講師: 山田 明教授

お盆休みの開催で、どれだけ集まるか当日まで不安であった。猛暑のなか 22名の参加があり、内心ほっとした。顔なじみも多く、いつもの調子で話できた。

今回のテーマは「COP10と名古屋の観光まちづくり」である。まず、名古屋の個性と魅力について、各種調査の評価から話を始めた。いま話題の村上春樹さんによる『地球のはぐれ方』の「魔都、名古屋に挑む」も紹介した。あまり芳しくない評価が多いなか、魅力アップの戦略手段として、観光まちづくりを提案した。座長を務めた名古屋の観光推進を考える研究会の成果から、節目の2010年に向けCOP10開催とからめ「都市型エコツーリズム」を提唱して、今後の課題を問題提起した。

1時間余り話して質疑に移った。最初から厳しい？質問・意見が飛び出したが、示唆に富んだ意見や提案も多かった。広域的な視点、札幌など都市比較による名古屋論、名古屋の魅力や観光資源の再発見、魅力アップに向けたNPOや住民の役割など、名古屋の観光推進を考えるうえで参考になった。

嬉しかったのは、参加者から後日お礼のハガキが届いたことである。そこにも名古屋のまちづくりについての提案が書かれていた。ただ残念だったのは、環境と観光とまちづくりの連携、「都市型エコツーリズム」について、あまり反響がなかったことだ。10月の市民公開講座や観光の講義に向け、説得力を高めるために？努力していきたい。

山田 明(同研究科教授)



第28回 サイエンス・カフェ 9月20日(日)

テーマ: 「問題な日本語

—日本語の何が問題か—

講師: 成田 徹男教授

9月20日、丸善にて人間文化研究所主催サイエンス・カフェが行われました。この日は、言語学のご専門である成田徹男



教授が、「問題な日本語——日本語の何が問題か——」と題され、現代の日本語の問題として、「ら抜きことば」や「敬語の変化」を中心に、ご講演くださいました。

「ら抜きことば」は、最近特に話題となっている「見れる」「来れる」といったことばで、「誤用ではなく、合理的な変化の進みであり、今後は「ら抜き」の形がふつうになるという説もある。」というお話もあり、大変興味深く拝聴しました。

「敬語の変化」については、「方言の敬語が、消えつつあり、方言の敬語が共通語化している。」といった「方言の敬語の共通語化」や、「「おいしゅうございます」が消えつつあり、「おいしいです」がふつうになりつつある。」といった、「ていねい体の変化」をお話くださいました。「消えつつある」ことばを、私たちはどのように継承していくのかを考えるきっかけを、与えてくださいました。

質疑応答において、「敬語の問題」、「ら抜きことばの使い分け」、「テレビにおけるニュースなどの字幕」など、参加者の方々が多数質問されました。皆さんが日頃から疑問を持っていらしかったことを、質問として投げられたようです。次から次へと質問がされるなか、時間があつという間に5時を回り、会の終了を大変名残惜しく思われました。

村田 志保(同研究科博士後期課程)



● マンデーサロン

第25回 マンデーサロン 9月14日(月)
 テーマ: 「あんやたん」写真展に寄せて
 — 報道写真に見る戦後おきなわ —
 講師: 阪井 芳貴教授



写真展のパネルリストなど、豊富な資料を見ながら熱のこもった報告に耳を傾けた。参加者は23名であり、活発な質疑が行われた。翌日から開催される博物館での「あんやたん」写真展に案内する有意義なサロンとなった。以下は、報告者の阪井教授による事前案内である。

9月15日から、名古屋市博物館3階ギャラリーにて、沖縄タイムス社の所蔵する1945年から2008年までの報道写真から約200枚を展示する「あんやたん」写真展を開催します。この3月から5月まで、横浜の新聞博物館で開かれて約1万人の見学者を集めた同名の展示会の縮小版ですが、その概説的な話になる予定です。

沖縄戦終結後、本土から切り離されて独自の戦後を歩んだアメリカ世と、1972年の本土復帰後もさまざまな格差や変わらぬ基地負担に悩まされてきた新たなヤマト世を、時代を切り取り、またその時その時の課題を訴えてきた報道写真によって、一望することにより、ヤマト(本土)がいかに沖縄に無関心であったり貧弱な知識しか持ち合わせていないかを検証し、少しでも、沖縄の現実を理解する一助にしてみたいと思います。ちなみに「あんやたん」とは、「あのとき、あんなことがあったね」という意味のウチナーグチです。

山田 明 (同研究科教授)

◇ 今後の研究所主催行事の予定

● Human & Social サイエンス・カフェ

・11月15日 平田雅己准教授
 「銃社会アメリカの現状—近年の動向を中心に」

・12月20日 松本佐保准教授
 「民族・宗教・共生—プロテスタントとカトリックの歴史的和解・北アイルランドのテロの終結について」

● トーキング・カフェ

始まりは昨年春のこと。山田明先生が人間文化研究所所長に就任された折、研究所の有効利用と院生の交流の場づくりの目的でこのトーキング・カフェが始まった。人間文化研究科修了生である私は、お茶やお菓子を準備し、開催日の当番として関わっている。

2年目に1階から7階に場所を移し、現在は快適な広さと素晴らしい眺望を楽しめる絶好の場所となっている。ただ残念ながら、訪問者数の減少が目下の課題である。

ここ数回は、テーマを設定して討論しようと院生の伊藤泰子さんが尽力していただき、中国人留学生との「名古屋」について語る交流会や、映画「マダム・バタフライ」鑑賞会などが行われた。時には、名古屋市立大学人間文化研究科のあり方についての熱い議論が始まり、充実したひとときを過ごすこともある。

将来的には、院生の研究テーマについての客観的な意見交換や修士論文の事前発表の場にもしたいというのが、当番役の願いである。

重原 敦子(同研究所特別研究員)

● 「市民学びの会」から

市大祭 「ジャズカフェ&歌声喫茶」

日時: 11月14日(土) 午後1時~午後5時
 場所: 2階 音楽室
 名古屋芸術大学・ジャズグループ
 小田ジャズグループ
 丸山素子ピアノ演奏による、歌声喫茶

名古屋芸術大学の学生ジャズグループと小田ジャズグループをお招きしました。

最後は村井名誉教授の提案による歌声喫茶に♪歌詞カードも用意します。

JAZZ

What is your blood type?

Kari Kostainen

Many moons ago when I was a young teacher working in China, I was asked a question about my salary. I do not remember my reply but I do remember being surprised by such a question. Why would someone dare to ask me a private thing like that, I wondered? I look back on that question and smile now. I learned something about Chinese culture that day. My lesson came suddenly and unexpectedly. Nevertheless, it was a lesson.

Education is sometimes formal. We might listen to a lecture, participate hands-on in a workshop or practice playing Mozart on a piano. Sometimes, however, “education” happens when we least expect it, especially in a cross-cultural situation.

Here in Japan, someone once asked me about my blood type. This again was a question you would never normally ask a teacher, colleague or friend in Australia, my adopted country. The question surprised me, and made me consider the reason for it. I was not ready for this question and had to consider a suitable answer. So, what is my blood type? I am not going to tell you. It’s private!

● ドキュメンタリー『羊飼いと一緒に』上映会 & 作者脇山美伸さん講演会

イタリア・ピエモンテ州の山でチーズを作る羊飼いを撮ったドキュメンタリーフィルムを、現在スローフードで有名なイタリアのブラ市在住で、日本に一時帰国中の作者脇山美伸さんをお迎えして上映します。

イタリアに興味のある方、チーズに興味のある方、インタビュー調査に興味のある方など、是非お越し下さい。

日時：11月13日(金)16時30分～18時30分

場所：1号館(人文社会学部棟) 207教室

連絡先：佐野 直子 sano@hum.nagoya-cu.ac.jp 052-872-5817

● 人間文化研究所 「COP10と環境まちづくり」シンポジウム

日時：12月19日(土) 13時30分～17時

会場：1号館(人文社会学部棟) 1階会議室

「都市の緑を守る意義」「耕作放棄地の活用と身近な生態系」などの報告と質疑

編集後記

早くも、2009年最後のニュースレターのお届けです。記事にもありますが、研究所のご後援をいただいた「あんやたん写真展」は9月15日から10月17日まで、つまり、まだまだ残暑の中で開かれたのですが、その閉幕を待つように急に秋が深まりました。おかげさまで、写真展は延べ1500人余の方にごらん頂きました。こういう催しを機に、市立博物館との連携もひろげていけるといいなあ、などとも考えております。来年に向けての宿題です。ニュースレターもその一助になることを期待しています。(さ)